

ぼかし表現「とか」についての考察

劉 暁 傑

はじめに

ぼかし言葉は、90年代から若者を中心として使われはじめ、次第に広がっていった。その代表的なものには、「～とか」、「～のほう」、「～みたいな」、「私的には～」「～ていうか」などがある。これらの一見不要な語を文中や文末に添えて表現を「ぼかす」のである。そのなかでも「とか」は、会話の中で好んで用いられることが多かったので、「とか弁」と呼ばれることもある。「とか」の近年の新用法の例として、平成11年の「国語に関する世論調査」に取り上げられているように、「鈴木さんと話をしてました」というべきところを、「鈴木さんと話とかしてました」というものが挙げられる。

現在の状況を見ると、かつて若者言葉の典型だと批判されがちだった「とか」の使用は、若者だけではなく、大人を含めた広い年齢層にも広がっており、今やごく自然な表現として定着しつつあるようである。これは一時的な流行で終わることが多い若者言葉¹⁾においては、異例と言っていいほど長命であると言える。こうした背景を踏まえると、日本語教育の観点からも、日本語学習者が「とか」の近年の用法をよく理解し、正しく把握するように指導することが必要となるように思われる。従って本稿では、ぼかし表現としての「とか」を考察し、その主な使用パターン及び意味機能を明らかにしたい。

1. 各辞書による解釈について

「とか」の語義について、いくつかの国語辞書に当たってみた。すべての辞書に共通しているのは、まず、例示的に列挙する用法の記載、そして、内容が不確かであることを表す用法の記述である。以下、代表的な例として、『日本国語大辞典』（第二版 2001）の記述の一部を抜粋する。

- (一) (格助詞「と」に係助詞「か」の付いたもの) 不確実な想像または伝聞を表わす。
- (二) (格助詞「と」に副助詞「か」の付いたもの) はっきりしない事柄を指示したり、ある事柄を代表して示したり、いくつかの事柄を例として示したりする。

しかし、若者がよく用いるぼかし言葉としての「とか」の新用法については、上記の『日本国語大辞典』には、その記述はない。この用法を載せている辞書も多いが、各辞書の間で記述が異なっており、一つの用法として独立して記述しているものは多くない。以下、いくつかの辞書の

記述を例としてあげる。

表 1

辞書名	「とか」の新用法に関する記述
広辞苑 (第六版 2008年)	一つの物事だけを挙げ、他を略していう。または、それと特定しないで言う表現。近年の用法。
三省堂国語辞典 (第六版 2008年)	(俗) ものごとをほかして言う言葉。など。
明鏡国語辞典 (第二版 2010年)	若者言葉で、断定の調子を避けてやわらげる。伝統的な言い方では、ほぼ「など」「でも」にあたる。
旺文社国語辞典 (第十版 2010年)	事実をあいまいにほかして言う語。

この用法は他の辞書では補充説明として扱われている。例えば、次のようなものである。

『岩波国語辞典』(第七版 2009年)

「一九八十年ごろから特に、「とか」で言いさして、更につけるまでもない文末に添えて、(自分の発言の責任を内容と共に) ほかす用法が若い世代で広まった。」

『大辞林』(第三版 2006年)

「近年、若者の間で、事項を列挙するのではなく、その事項を断定する意をほかして述べる際に「とか」を用いる用法が見られる。」

『新明解国語辞典』(第六版 2005年)

「最近の若者は断定を避けた、一種の婉曲表現として用いる傾向がある。」

『集英社国語辞典』(第二版 2000年)

「近年終助詞として不確かな伝聞でも言いさしでもないのに、文末に「とか」をつけ、副助詞としても、不確かさの意味もなく、「映画とか見たり」「学校とか行って、勉強とかして…」など、事柄と発言の責任をあいまいにする言い方が若年層に広がっている。」

以上のように、「とか」の新用法についての解釈が各辞書に掲載されている。このことから、現在定着しつつあるという傾向が明らかである。しかし、「とか」の新用法が実際の場面でのどのように使われているのか、具体的にどんな働きをしているのか、この点について明確な記述はないようである。

2. 考察対象と考察方法

2.1 考察対象

「とか」の最も基本的な用法は、「A とか B とか」のように、「とか」を複数用いていくつかの事柄を列挙する使い方である。本稿はほかし言葉としての「とか」を考察対象とするため、この「とか」の基本的用法は扱わない。同様に「A とか B」のように、二番目の名詞の後ろの「とか」が省略されるものも考察から除外する。但し、不確かな伝聞や事柄を表す用法は、内容を

つきりさせず、あいまいにするニュアンスも含まれているので、本稿の考察対象に含めることにする。

2.2 考察方法

本稿では、前節で述べたほかしの意味を表す「とか」を対象に考察を行った。まず日本語の話し言葉コーパスやテレビ番組などを利用して、出来る限り多くの例文を収集した。収集した例文はまず、「とか」の出現位置によって分類を行い、次にその意味機能を分析してみた。それに加えて、日本人の学生を対象にアンケートを行い、現状における「とか」の使用実態を調査した。

本稿で挙げた例文の大部分は話し言葉コーパスから取ったものである。もう一部はテレビ番組や辞書からのもので、それぞれ (T) と (辞書名) と記する。

3. 先行研究

「とか」の新用法が登場して以来、新聞や雑誌のコラム欄に取り上げられたり、さまざまな分野で研究されたりしている。その多くは社会学の分野であり、若者の対人関係・コミュニケーション意識に関する研究が多かった。辻大介 (1999) は『「とか」弁のコミュニケーション心理』の中で、これまで一般論であった「対人関係希薄化論」に対して、独自の見解をみせた。つまり、「とか」などの若者語のあいまい表現は、対人関係の重力場に拘束されることから身を引き離すことにあるという視点である。彼は、互いを束縛する重い関係ではなく相手に寄りかからない軽い関係を志向する心理、具体的には、場面や状況に応じて気軽に切り替えることのできる対人関係への志向が、あいまい表現多用の理由であると分析している。一方、言語学分野での「とか」に関する学術論文はあまり多くない。遠藤織枝・谷部弘子 (1995)、丸山直子 (1996) はそれぞれ「とか」の新しい用法を紹介したが、意味機能の説明は十分になされていないように思われる。天野みどり (2001) も「とか」の若者世代の用法は卓立的提示と述べ、「とか」の基本的意味である一部例示という意味を介して、他の例示表現と平行的に拡張されて得た意味であると分析している。

4. ほかし表現「とか」の使用パターンと意味機能

4.1 ほかし表現「とか」の使用パターン

本稿では、これまでに収集したほかしの意味を表す「とか」の例文を、接続する品詞によって、次の五種類に分類した。

- ① 名詞に後置する
- ② 引用節に後置する
- ③ 「とかいう」の連体修飾用法
- ④ 助詞「たり」に後置する

⑤ 動詞に後置する

複数の項目に分類できる用例もあり、たとえば、「とかいう」の「とか」は名詞に後置する場合もあるし、動詞に後置する場合もある。この場合、本稿では後ろに名詞がつくというような連体修飾の用法を独立して扱っているため、そちらに分類した。また、動詞につく「とか」は、引用節につく「とか」である場合が明らかである場合、それを優先し、分類②に入れることにする。

4.1.1 名詞に後置する

「とか」は名詞の後ろにつくことが多い⁽²⁾。名詞に後置する「とか」は文中に用いられる場合もあるし、文末に用いられる場合もある。

まず、文中の場合を見よう。

1. 地価とかが下がって、それで、まあ、経済は成長の方向に向いていると思うんですけども。
2. ええ、研究会等、歴史学の研究会とかをやっていますので、(1:うん)ま、そういう活動に関して、(1:うん)多少触れたりしています。
3. なんか、いきってた男子とかに超いじめられてた、みたいな
4. そういうとこのビジターセンターとかで、(1:ええ)あのスライドショーみたいなのを、やったりはするんですね。
5. 10時とかまでなら大丈夫かなー。
6. なんか、こん、あたしも、ね、(うん)普通のじゅ、授業の(うーん)ゼミで一、うん、発表者の(うーん)、あの卒論、(うんうんうんうん)のけ、計画とかの発表ありますよね。
7. ただ革製品とかはよく、海外に出てるようですけども。
8. あまり外食とかはされず? (T)
9. で、なんかこう最初過去問見ても、なんか音声記号とかもよくわかってなくてー〈笑い〉、うーん。
10. 夏の間に、車でどっか、旅行とかもしたいなあって思ってます
11. 〈結構〉} } 学部との交流とかってありますか?、なんか。
12. 結構大学院の試験とかって難しかったですかー?。
13. ボランティアのクラスとかよくあるじゃないですか。
14. いじめとか、自分でやっても楽しくないしさ。
15. え、どこ、海外旅行(あ)とか、行った(あ)ことありますか?。
(うんうん)全然近いのに中国とか行ったこと〈なくて〉} }。

以上のように、「とか」が名詞に後置する場合は、通常、格助詞や係助詞「は」、「も」、「って」などがその後ろにつく。主格を表す「が」や対格を表す「を」、方向を表す「へ」は省略されることがある。

次に文末の場合を見ると、「とか」が名詞の後ろに付いて、そのまま文を終わらせる場合もある。例えば、

16. 何かおいしいものを食べた?

ううん、ラーメン屋さんでラーメンとか。(T)

17. 学生さんはそのプレゼントのやりとりっていうのは、どういう、ような時に、するんでしょう？

ああー、一番多いのは誕生日とかー。

18. あと、あと2、3分ぐらいとか？

そうね。

4.1.2 引用節に後置する

引用節とは、引用の助詞「と」に先行する節のことである。引用節をとる動詞は、「言う」「聞く」などの伝聞を表す動詞、「思う」「考える」などの思考動詞がある。例えば、

19. 一番最初に描いたときは、半年ぐらいかけて（ふーん）ゆっくり描いたんだけど、なんか最近、あーなんか何日までにしなきゃいけない（あー）っていう締め切りがあるから、それ展覧会に出すには（あーはいはい）何日までっていう風に決まってるから（うんうんうん）、は、もうすぐ描かなくっちゃ”とか言っ（うんー）慌てて描いたりして、2週間くらいで急いでやったりとか、そういう風になっちゃって…。

20. 多分見れば（うん）聞けば分かるかなあとかと思うけど、今、歌えません（2人で笑い）。

21. まあ希望としては、こん、この夏は別に（うーん）英語圏行こうとか考えてないんですけど（うーん）、まあもし機会があれば、〈いつか行きたいなー〉と思って〉{ }。

22. 死ぬ人も出るとかって書いてあった。

23. 日本人のほうがちよっと、とかって（〈笑い〉）思ったんですけど。

24. でもなんかたまに、すごい、こないだ会った時に、（うん）ちよっとかわいい服を着て、（んー）“あ、今日女の子っぽいね”（〈笑い〉）って言ったら“えー”とかって言っ（2人笑い）。

25. で今、大学院のにゅ、方に行こうかなと思って、（ふーん）まあ大学院に入ったら、（うん）“1年休学して行こうかなー”とかって。

例（22）から（24）までは例（19）、（20）、（21）と若干異なり、「とか」と動詞の間に引用を表す「って」を付け足したバリエーションである。例（25）は後ろの動詞が省略され、「って」がついているものである。これら以外に、動詞も「って」も省略される。つまり、「とか」の後ろに何も無く、そのまま文を終わりにする場合もある。例えば、

26. なんかね、井之頭公園はなんかね、その池の神様が弁天様かなんかで、その、女の神様が嫉妬して別れさせちゃうとか。

へー……。[驚いたように]

27. 日本であ、し、いない間に随分、なんか変わっちゃったとか。

あはは、そうですね

28. あっ、こういう言い回しっておもしろいなーとか、
〈へー〉{ }。

29. 〈わたし〉{ }は、の方‘ほう’はならないんですけど（うん）、親の方‘ほう’が心配症な

んですよ。

ええー。

“生きてるかー” とか (<2人で笑い>)。

4.1.3 助詞「たり」に後置する

これは「とか」が助詞「たり」の後ろに付く場合で、主に「動詞連用形+たり+とか」というパターンである。例えば、

30. つくるといとか、サンドイッチとかそういう、(1:あーそう) 焼くのはやりませんが、(1:うんうん) こねたりとかはしませんけど。
31. 他の大学の人達と一緒におっきい展覧会開いたりとかしてー、年に2回はやってるんだけど。
32. 旅行で、(んー) ちょこっと行ったり (んー) とかは、するんですけどね。
33. 皆さんが、あの一、委員会のほうに出ておられたりとか。
34. <うん> |)、それで行くとなんか、迷惑かけたりとか <笑い>、うーん
35. 買って、聴くと、なんか、音が (あー)、途切れたりとか。
そっか。[小声で]

以上のように、「とか」の後ろに言葉が続く場合もあるし、省略される場合もある。

4.1.4 「とかいう」の連体修飾用法

これは「とかいう」の形で、後ろに来る名詞を説明する連体修飾の用法である。例えば、

36. 計算とかいうことよりも、一生懸命、一生懸命ガムシャラに頑張って (T)
37. 授業がちょっと混乱したとかいう話はあの一、伺ったことがありますけれど。
「とかいう」のバリエーションとして、「とかっていう」という形も見られる。
38. でも、その、飲ミニュケーションとかっていう言葉、さえ (2:ああありますねえ) 最近聞きますよねえ
39. あの勝つこと、の為のドーピングとかっていう (2:うん) 問題ありますよねえ。

4.1.5 動詞に後置する

「とか」が一つの動詞終止形につくものも少数存在している。例えば、

40. メールで送るとかも出来るんだよ。
41. 前の日にまずお酒を飲まないで、お酒を抜くとか考えてみたらいかがでしょうか。 (T)
42. 謝るとかはちょっとだめですよ。 (T)
43. 死んだ人間が生き返るとかありえない。 (T)
44. 結婚式に出るとかで、彼女は着物姿で現れた。
また、「とか」で文を終わりにする場合もある。
45. あとはソースを選べるとか?
うん。
46. え、じゃあ絵を描くのは、自分の興味、それとも前に、前に習ったことあるとか？。

4.2 各パターンにおける「とか」の意味機能

4.2.1 名詞に後置する「とか」

名詞に後置する「とか」は文中に現れることが多いが、そのまま文を終わらせる場合もある。まず、文中の「とか」の15例を見よう。この場合の「とか」は、まず格成分や主題をとりたてる働きをしているといえる。「とか」のついた部分は、要素が1つであるのに、「とか」によって、ほかにも同類があるように表現されるから、ほかしの効果が生じる。仮に「とか」を使わなければ、ほかしの意味がなくなるわけである。「とか」をつけると、他の同種のものを言外に想定しているように感じられやすいが、実は二つの場合がある。一つは列挙されたもの以外に同類のものが存在するが、省略されている場合である。例えば、

2. ええ、研究会等、歴史学の研究会とかをやってますので、(1:うん)ま、そういう活動に関して、(1:うん)多少触れたりしてます。

例(2)では、歴史学以外の研究会をやっている可能性があるが、「歴史学」だけを代表として挙げ、他を暗示している。典型的な例を次に挙げておく。

47. お茶とか飲もうか。

これは「お茶でも飲もうか」の「でも」の代わりに、「とか」を用いたものである。お茶と特定しないで言う表現で、他のものをほのめかしている。この場合は、お茶への誘いを相手に押し付けがましく感じさせない効果が生じ、一つに特定することを避け、相手に他の選択肢を残しているのである。これらは「例示暗示」の用法と言える。

もう一つは、並列される同類のものが実は存在しないのに、「とか」が使われている場合である。つまり、他を省略しているのではなく、言及しているのは特定の一つという場合である。実際の会話例では、このような使われ方のほうが多いように思われる。この場合の「とか」にはどのような意味機能があるかを次の例から考えてみたい。

1. 地価とかが下がって、それで、まあ、経済は成長の方向に向いてると思うんですけども。
3. なんか、いきってた男子とかに超いじめられてた、みたいな。
5. 10時とかまでなら大丈夫かなー。
7. ただ革製品とかはよく、海外に出てるようですけども。
13. ボランティアのクラスとかよくあるじゃないですか。

以上の例文は、それぞれの文末に「と思うんですけども」、「みたいな」、「かなー」、「ようですけども」、「じゃないですか」というような非断定的な表現がついているので、話者が事柄に対して、断定を避けていることが明らかであろう。これらの「とか」は後ろと呼応して、婉曲的に断定を回避する機能であると言える。それは事柄と発言の責任をあいまいにする表現で、万一違う状況になった時の責任を減らそうとしているためであろう。つまり、これらは「断定回避」の用法と言える。

次に、「直示軽減」という意味機能を持つ例文を見ていきたい。「直示軽減」とは、彭飛(2006)が提唱している用法である⁽³⁾。例えば、「お茶とか飲もうか」という時、お茶しか用意していない場合もある。この場合の「とか」は、直接に物事を指すことを避け、表現を和らげるた

めに使われると考えられる。これが「直示軽減」の用法であり、次の例文がこの意味機能を持っていると言える。

4. そういうとこのビクターセンターとかで、(1:ええ) あのースライドショーみたいなのを、
やったりはするんですね。
6. なんか、こん、あたしも、ね、(うん) 普通のじゅ、授業の(うーん) ゼミーで一、うん、
発表者の(うーん)、あの卒論、(うんうんうんうん) のけ、計画とかの発表ありますよね
=。
8. あまり外食とかはされず? (T)
10. 夏の間、車でどっか、旅行とかもしたいなあって思ってます
11. 〈結構〉}! 学部との交流とかってありますか?、なんか。
12. 結構大学院の試験とかって難しかったですかー?。

例(4)、(6)、(10)は事柄を述べる平叙文で、文末には非断定的なニュアンスがなさそうである。例(8)、(11)、(12)は聞き手に質問を出す疑問文である。「とか」を付けることにより、その前の名詞、「ビクターセンター」、「計画」、「外食」、「旅行」、「交流」、「試験」の直示性が和らげられている。この用法は物事を直示することを軽減し、柔らかく表現すると共に、婉曲的なニュアンスを含めるものである。かつてはこのような用法はなかったが、現在では一般的に用いられている。例えば、

48. イベントとかがおれはけっこう印象に残っている。 (T)
49. お金とか応援してもらいたい。 (T)
50. そこは学校の寮とかありますか?
51. アルバイトとかしてるんですか。

上記の「直示軽減」の用法も、先に挙げた「断定回避」の用法も、どちらも表現を和らげる効果がある。この両者の違いについては、次の文⁽⁴⁾を例にして説明したい。

52. 温泉とか行こうと思っています。
53. 温泉とか行こうかなと思っています。

2例とも話者の温泉へ行こうという気持ちが読み取れるが、後者のほうは「かな」を足すことで、発言の確実性がやや落ちるわけである。「とか」は「かな」と呼応し、断定を避けることで、実際に温泉に行かなかった場合の責任を逃れようとしているのである。つまり「断定回避」の用法である。これに対し、前者の「とか」は、「温泉」を直示することを和らげている「直示軽減」の用法である。

次に、否定的述語を伴っている例を見てみたい。

9. で、なんかこう最初過去問見ても、なんか音声記号とかもよくわかってなくてー〈笑い〉、
うーん。
14. いじめとか、自分でやっても楽しくないしさ。
15. え、どこ、海外旅行(あ) とか、行った(あ) ことありますか?。
(うんうん) 全然近いのに中国とか行ったこと 〈なくて〉}!}。

以上の3例は否定的述語と繋がっているものである。例(14)は否定的評価を表す「なんか」に言い換えることができる。ここで「いじめ」を例示して、軽んじている意味合いがあるように思われる。例(9)、(15)の「とか」は「さえ」の意味に近く、それぞれ「音声記号」、「中国」を強調的に例示し、その他の場合は当然であると類推させるニュアンスを持っているだろう。要するに、「とか」の後ろに否定的述語がくる場合、否定的評価を表す場合や、例示類推の「さえ」の意味を表す場合がある。どちらにあたるかは文脈によって決まる。

最後に「とか」で文が終わっている例を見る。例(16)は後ろの述語「食べた」が省略されたもので、食べたもののうち「ラーメン」を代表として挙げ、ほかをほのめかしているとも考えられるが、ラーメンしか食べなかった場合もある。その場合の「とか」ははっきり「ラーメン」を指すことを和らげている「直示軽減」の用法である。例(17)、(18)は後ろに判断を表す「です」が省略されたものである。例(17)で言いたいことは「一番多いのは誕生日です」ということであるが、話者の発言内容への不確実性を「とか」で表し、断言を避けている。同様に例(18)も疑問の形であるが、「あと2、3分ぐらいですか」というような断定的な口調で言わず、「とか」でその不確実性を表しているのである。

4.2.2 引用節に後置する「とか」

引用節に後置する「とか」は、引用を表す「と」に不確かさを表す「か」が付いたもので、二つの機能を兼ねていると言える。辞書によると、この場合の「とか」は不確かな伝聞の内容を表すということだが、ここではもう少し詳細に分析してみたい。まず、辞書に挙げられている次の2例を見ておく。

54. 山本さんは具合が悪く、寝たっきりだととか聞いている。 (『大辞林』)

55. 明日から出発だととか言っていた。 (『明鏡国語辞典』)

この2例では、引用内容は話者自身の発言ではなく、他人からの伝聞なので、「とか」でその不確かさを表している。そのため、この場合の「とか」は、不確かな内容を表すと同時に、断定回避の働きをしていると言ってもよいであろう。そのようにして発言内容への責任を逃れるのである。本稿で挙げた例(22)、(24)も話者自身の発言ではなく、「とか」で不確実性を表し、断定回避をしている。例(20)、(25)は話者自身の発言であるが、「とか」をつけ、不確かな内容を示すとともに断定回避をしている。

次に、これも辞書からの引用であるが、以下の例を見てほしい。

56. 「好きです」ととか言ってしまった。 (『大辞林』)

ここでの「とか」も断定回避と見なすことは可能である。しかし、むしろここでは、話者の気持ちとのつながりを考えることが重要である。話者はここで、「好きです」とはっきり言うのが恥ずかしいと感じている。そのため「とか」を利用し、その照れくさを軽減しているのである。例(19)、(21)、(23)も同種の例である。つまり、前の引用節の部分を明示することを和らげるため、「とか」を使っている。要するに、3例とも不確実さによる断定回避ではなく、事柄をはっきり指すことを和らげる「直示軽減」の用法である。

最後に、引用節の後ろについて、最後の動詞が省略されている場合の「とか」を見てみよう。

このような文末につく「とか」の用法が以前からあったことは知られている。『日本国語大辞典』（第二版 2001年）には「不確実な想像または伝聞を表す。文中に用いて、文末の語句と呼応する場合と、文末に用いられる場合がある」と説明されている。本稿の例（26）は伝聞の内容を表すもので、「とか」でその不確実性を示している。例（27）と（28）は自分の考えを表すものであるが、「とか」を付け足し、話者の発言内容に対する不確信を示し、責任を逃れようとしている。この3例では伝聞の内容にしろ、自分の考えにしろ、話者は断定することを回避し、「とか」で言いさして、発言の責任を内容と共にほかしているのである。これに対し例（29）は、動詞「思っている」等が省略されたものと考えることができる。そしてその意味機能は断定回避ではなく、例示しているのである。つまり、親が心配しているいくつかのことから一つを取り上げて、他の事柄をほのめかしているということである。

以上をまとめると、引用節に後置する「とか」は、後ろに「言う」、「思う」などの動詞がついている場合、不確かな内容を表すと共に、断定回避をする意味機能を持つ。そして、文脈によっては、内容が不確かであるかどうかに関わらず、「直示軽減」の用法もある。「とか」で終わる言いさし文の場合、断定回避の用法が多い。ただし、少数ではあるが、例示暗示の用法も見つかる。

4.2.3 助詞「たり」に後置する「とか」

「たり」は接続助詞として動作や状態を並列して述べるのが基本的用法である。しかし、同種の事柄の中からある動作、状態を例示して、他の場合を類推させるという用法もある。この「たり」が「とか」と結びついた場合、両者が同時に同じ例示暗示の機能を果たしているとは考えにくい。なぜなら、「とか」がなくても、文の意味はほとんど変わらないからである。したがって、この場合の「とか」は、例示された動作、状態をはっきり言うことを和らげる「直示軽減」の用法であると思われる。特に「たりとか」で終わる言いさし文の場合には、その婉曲的な意味合いが顕著になっているように感じられる。

「たりとか」の意味を分析する上で、次の2例も参考になる。下記2例の「とか」は同じく「直示軽減」の用法であるが、文中の位置によって、若干ニュアンスが異なっている。

57. 映画とか見たり (『集英社国語辞典』)

58. 映画を見たりとかして

前者は「映画」を明示することを和らげているのに対して、後者は「映画を見たり」することを婉曲的に表現しているのである。

4.2.4 連体修飾用法における「とか」

4.1.4で挙げた4例はいずれも連体修飾用法で、例（36）、（37）は「とかいう＋名詞」という形式であり、例（38）、（39）は「とかいう＋名詞」のバリエーションで、「とかっていう＋名詞」という形式である。「とか」の前に名詞、あるいは一つの文が来るのが普通である。たとえば、辞書に挙げられている次の2例を見ると、

59. さきほど佐藤さんとかいう人から電話がかかってきましたよ。 (『あいまい語辞典』)

60. 天気予報によると、明日あたり大雨になるとかいう話ですよ。 (『あいまい語辞典』)

不確かさを表す用法は以前から使われていたことは明らかである。4.1.4で挙げた4例における「とか」を見ると、その意味機能としては、不確かさによる断定回避の機能がまず挙げられる。たとえば、例(38)、(39)がそうである。さらに、不確かさと関係なく、ただ物事や事柄をはっきり指すことを和らげる「直示軽減」の機能を持つ場合もある。例(36)、(37)がそうである。つまり、例(36)では「計算」ということを、例(37)では「授業がちよっと混乱した」という話をはっきり指すことを和らげるために、「とか」が用いられているのである。

4.2.5 動詞に後置する「とか」

動詞の後ろにつく「とか」が文中に現れる場合、例(40)～(44)のように、その前の動詞を体言化する形式体言的な働きをしていると言える。体言化された部分は、名詞のように文の補語になりうる。従ってこの場合の「とか」の意味機能は、4.2.1で述べた用法とほぼ同じである。例えば、例(40)、(41)の「とか」は「直示軽減」の用法であると思われる。つまり、「メールで送る」こと、「お酒を抜く」ことをはっきり指すことを和らげているということである。例42、43に関しては、後ろが否定的述語になっているので、「謝る」こと、「死んだ人間が生き返る」ことを例示し、軽んじている意味合いが込められ、否定的評価の「なんか」と同じ意味合いがあるのではないだろうか。例(44)では、他人から聞いたことを原因としているが、「とか」でその不確かさを示している「断定回避」の用法であると思われる。

また、例(45)、(46)のように、「とか」で終わる言いさし文の場合、「とか」が終助詞のように使われ、「とかということですか」の省略形と見なすことで理解しやすくなる。この2例は、「あとはソースを選べるということですか」、「え、じゃあ絵を描くのは、自分の興味、それとも前に、前に習ったことがあるということですか」といったような直接疑問文とほぼ意味が同じであるが、「とか」を使った表現を用いることで、話者の発言に対する不確かさを示し、婉曲的に表現する「断定回避」の役割を果たしていると思われる。

4.3 まとめ

以上の分析から、ほかし表現としての「とか」には、いくつかの意味機能があることが分かった。まとめてみると、主に次のようである。

- ① 例示暗示
- ② 断定回避
- ③ 直示軽減

いずれも内容をはっきりさせず、あいまいにする用法である。この三者の間にまったく関連性がないとは言えない。例示暗示の用法は並列・列挙という基本用法から派生してきたものであり、断定回避の用法も他を暗示する意味合いが、ある程度含まれている。断定回避の用法も直示軽減の用法も発話を緩和する機能がある。断定回避の場合は、発話に確信が持たないというニュアンスがあり、発言の責任を減らそうとしている。それに対して、直示軽減の場合は、物事を直示することを避けて、和らげている。

断定回避の用法は以前から使われていたものである。従来の用法は伝聞の内容を表す時に使わ

れ、不確実性を示していた。従ってそれは断定回避の機能を果たしていたのである。しかし現在では、伝聞のみならず、自分の考えでも、自信のないこと、不確かなことなどを表す時、いずれも「とか」をつけ、断定を回避する用例が多く見られる。これは「用法の拡大」ということで説明され得る。

これに対して、直示軽減はかつてはなかった用法である。日本人は遠まわしの表現を好み、直接表現による恥ずかしさを軽減するためなど、頻繁に婉曲的な表現を使用する傾向があるように思われる。「とか」の「直示軽減」の用法は新しくできた婉曲表現の一種であるといえる。

5. 「とか」の使用実態についてのアンケート調査の結果分析

「とか」の使用実態を正確に把握するために、日本の大学生を主な対象として、アンケート調査を行った。調査は「とか」を使って、文を二つ以上作ってもらう、という形で行った。調査対象は日本人 115 名（女性 58 名、男性 57 名）で、収集した例文は 307 例となった。その中で、複数の事柄を並列する用法の例文は 151 例であり、他の 156 例は単独用法である。本稿の対象とする後者の例 156 例を分析・分類した結果が、以下の表 2 と 3 である。

表 2

位置	男性 77 例		女性 79 例	
	名詞に後置する	67	87%	61
引用節に後置する	6	7.8%	10	12.7%
助詞なりに後置する	1	1.3%	1	1.3%
「とかいう」の連体修飾用法	0	0	2	2.5%
動詞に後置する	3	3.9%	5	6.3%

表 3

意味機能	男性 77 例		女性 79 例	
	例示暗示	3	3.9%	5
断定回避	10	13%	10	12.7%
直示軽減	53	68.8%	53	67.1%
否定的評価	11	14.3%	11	13.9%

現在「とか」の単独用法は並列用法と同じように、一般的に用いられている。上記の分析結果から分かるように、単独用法には様々な接続方法があり、意味機能も多様である。結果から言えることは、名詞につくものが最も多く、「直示軽減」と「断定回避」の用法が圧倒的に多く使われているということである。

6. ぼかし表現としての「とか」が多用される文化要因

ぼかし表現としての「とか」は20年も前から若者言葉として流行しはじめ、現在でも廃れることはなく普通に使われている。その理由としてまず、日本的なものの考え方に繋がっているのではないかと考えられる。日本の民族性は昔から婉曲的な表現を好むと言われていいる。要するに、遠慮して物事をはっきり言うことを避け、柔らかく遠まわしな言い方をする伝統的な国民性があるということである。日本人は人間関係の「和」を保つために、お互いに気を配りながら、協調的な付き合いをする一方、傷つけたり、傷つけられたりすることが生じないようにお互いに距離を置いて、軽い人間関係を持っていると考えられる。「とか」は元来、不確実な想像または伝聞を表す語である。その不確実性が、断定を避ける一種の婉曲表現と結びついていいるのではないかと考えられる。自信のないことに対して責任を迫及されることを避けようという責任回避の心理の影響で、「断定回避」の用法がよく使われるわけであろう。また、会話を円滑にするためには、雰囲気重要である。「とか」のぼかしを利用し、軽い雑談というような雰囲気を醸し出すことで会話を促進させることができる。その点にも「とか」の使用頻度が高い理由があるだろう。

おわりに

本稿はぼかし表現としての「とか」を対象に考察を行った。かつて若者言葉として問題視された「とか」が、現在でも用いられ続けているのは、やはりその言葉自身の意味機能の豊かさとならがりがあるのではないかと思う。「とか」は、「AとかBとか」のような並列・列挙という基本用法以外に、一つのことを挙げ、例示暗示や断定回避、直示軽減の意味用法がある。そして、否定的評価を表す「なんか」や例示類推を表す「さえ」の意味合いもある。このことから考えると、「とか」は状況により様々な意味合いを持つことができ、そのため手軽で使いやすい言葉となっていると言ってもよいであろう。現在、仲間内のコミュニケーションを円滑にさせるための習慣的な表現として、無意識のうちに使われる傾向があるようである。その一方、使用場面には注意が必要で、改まった公式の場では使用を控えるべき表現でもある。日本語学習者はこのような点を十分考慮しなければならない。そして、その意味機能を正しく理解し、スムーズなコミュニケーションのために、日常会話で適切に用いることが重要である。

注

- (1) 米川明彦(1994)は「若者語とは」(『日本語学』13巻13号)で若者語の平均寿命は1~2年であると指摘している。
- (2) 「なんとか」は現在一つの連語として存在しているので、ここでは扱わない。
- (3) 彭飛氏(2006)ははっきりとした方向や方面を指すことを和らげる用法を「直示軽減」と言う。
- (4) 例(52)(53)及び後掲の例(58)は筆者が作成したものである。

参考文献

- 遠藤織枝・谷部弘子（1995）「話しことばに特徴的な語の新しい用法と世代差——『すごい』『とか』『ぜんぜん』『けっこう』について——」『ことば：女性による研究誌』第16号 現代日本語研究会、pp.114-127.
- 丸山直子（1996）「話し言葉の助詞——『とか』『なんか』『なんて』——」『東京女子大学日本文学』第85号 東京女子大学 pp.122-136.
- 砂川千穂（2000）「日本語における『とか』文法化について——並立助詞から引用マーカーへ——」『日本女子大学大学院研究科紀要』第6号 日本女子大学 pp.61-73.
- 辻大介（1999）「『とか』弁のコミュニケーション心理」『第3回社会言語科学会研究会予稿集』 pp.19-24.
- 天野みどり（2001）「若者ことば——銅メダルとかとった」『東西南北』2001 和光大学総合文化研究所 pp.100-107.
- 俵万智（2001）『言葉の虫めがね』角川文庫
- 山本尚平（2004）「日本語のぼかし表現『とか』とその英語相当語句」『言語コミュニケーション文化』1（1）関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会 pp.77-90.
- 橋本五郎（監修）読売新聞新日本語企画班（2003）『新日本語の現場』中央公論新社
- 彭飛（2006）『日本語の『配慮表現』に関する研究——中国語との比較研究における諸問題』和泉書院

辞書：

- 新村出（編）（2008）『広辞苑』第六版、東京：岩波書店
- 見坊豪紀ら（編）（2008）『三省堂国語辞典』第六版、東京：三省堂
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）（2009）『岩波国語辞典』第七版、東京：岩波書店
- 山田忠雄ら（編）（2010）『新明解国語辞典』第七版、東京：三省堂
- 松井栄一（編）（2001）『日本国語大辞典』第二版、東京：小学館
- 松村明（編）（2006）『大辞林』第三版、東京：三省堂
- 森岡健二ら（編）（2000）『集英社国語辞典』第二版、東京：集英社
- 北原保雄（編）（2010）『明鏡国語辞典』第二版、東京：大修館
- 芳賀綏・佐々木瑞枝・門倉正美（編）（1996）『あいまい語辞典』第一版、東京：東京堂

引用例のみの出典：

- 宇佐美まゆみ監修（2007）『BTSJ による日本語話し言葉コーパス1（初対面・友人、雑談・討論・誘い）』
「談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作」平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2)（課題番号15320064）研究成果
- 宇佐美まゆみ監修（2007）『自然会話で学ぶ日本語－試作版－』「談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作」平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2)（課題番号15320064）研究成果